

身体行為を誘発する装置としての記譜というアイデアから開始した「未完の記譜法」プロジェクトについて本年度は、①「大学の移転」そのものを記譜として捉える「アナ☆ボル」、②「脱-健常」をテーマにした「集団のアホーダンス」の2つの実験を紹介する。

①「アナ☆ボル」

「黒き大地をやぶりに出ぬ」というコトバから崇仁小学校の校歌は始まる。そこには子供たちへ受け渡すべき歴史への思いが込められているのだろうか。

2023年の京都市立芸術大学の移転先となった校舎は、今から3年後には取り壊される。今回の「アナ☆ボル」の試みは、「制度の時間」から外れた先行移転である。それはまた同時に、管理の網の目から、大地を解放する無目的な運動でもある。その為、期限をもうけず可能な限り作業を続ける事を重視している。まず放置された更衣室の床面にアナを穿ち大地に向けて手作業でゆっくりと掘り進む事からスタートした。このようなフルマイを私達は「アナーキテクチャー」と呼んでみた。それは政治活動としてではなく、地球の表面にアナを穿ち、その反対側にまで突き抜けるトンネルを掘る荒唐無稽な土木建築作業として捉え直す行為だ。その時、地球は、表面が閉じた球体から、その中心に虚空をそなえたドーナツへと変換される。それは、来るべき「ドーナツの地球」の住民へのオマージュであり、安全な更地の上に立ち上がる建築への「対位法」となるだろう。

②「集団のアホーダンス」

アートとケアについて、身体や個の表現からでなく、集団やコミュニケーションの視点から接近する事に重点を置いた。その為に、「アホーダンス」という旅芸人の一座のような造語をテーマに使用することにした。そこには、ヒトが他者や環境を「妙なフルマイ」で誘惑すること、立ち止まり、列を離れ、市場原理や効率化に包摂されることのない無根拠なフルマイの連鎖を生むという意味が込められている。プレ事業として開催した「生きたコトバ」をテーマにしたワークショップを踏まえたもので、異なる感性、思考、リズムを持つ人達による「新しいコミュニケーション」の実験的な記録映画の作成と、その成果発表をライブ形式で行った。ここでのコミュニケーションとは、ミスコミュニケーション、ディスコミュニケーション、対立、放置をも含んだ集団行為である。今回の「集団のアホーダンス」での試みは、「障害アート」を同一のものさしで測ることで多様な生の在り方を既存のタイプに包摂してしまう圧力や、作品行為を個人に還元してしまうことで他者や環境とつながる当事者達の「生の纏れ」を排除することへの抵抗としての批評行為であったように今は思う。

高橋 悟(美術学部教授)